

6 保護者・地域

日本PTA全国協議会「平成25年度教育に関する保護者の意識調査報告書」の中で、「あなたは子どもにどのような力をつけさせたいですか」という設問(複数回答可)があり、75.5%の保護者が「自らを律する力」を「ぜひともつけさせたい」と回答し、「できれば身につけさせたい」も含めると97.7%が必要だと思っている。社会の変化が大きくなうねりの中にある現代、未来を生きる子どもたちには「生きぬく力」を支えるものとして「自らを律する心」が育ってほしいと考えられているのではないだろうか。

まず今の保護者のおかれた状況を踏まえて、どのようにすれば保護者や地域が子どもたちの「自ら律する心」の育ちを促せるのか、考えてみたい。

(1) 現代の保護者事情

教育基本法第十条「父母その他の保護者は、子の教育について第一義的責任を有するものであって、生活のために必要な習慣を身に付けさせるとともに、自立心を育成し、心身の調和のとれた発達を図るよう努めるものとする」とある。子どもにとって家庭は安らぎの場所であると同時に、自立した生活を営む力の土台となる自律する心を育て、社会に船出するための港であるということとはどんな時代にあっても変わらないことだと思う。

ただ、今の社会では、ライフサイクルの変化による晩婚化が晩産化を進め、多くの若者が親になる年齢が遅くなっている。また女性が職業を持つようになり、仕事と子どもを産み育てることの両立を求めるようになったが、社会の意識や体制がこれを受け止め、女性を支えるまでに至らず、子どもを持つ母親に大きな負担があると言わざるをえない。さらに核家族化が進み、家庭の中でも「孤」が蔓延していると言われ、格差の拡大も家庭に大きな影を落としている。

周りの地域社会を考えても、かつては若者が大人として、さらには親として成長する場であった子供会、自治会、消防団等の組織率は下がり続け、地域社会の結びつきが希薄になり、親子を様々な場面で支えて来た地域の教育力も弱くなってきている。

その反対に、メディアを通じた大量の情報が際限なく押し寄せ、その中でとまどったり、逆に子育ての「正解」を求めたりする親も多いのではないだろうか。子育ては一人一人違い、正解がないものだと思うのだが。

そしてこのような社会の中で、保護者自身も、年齢差のある子どもと遊ぶチャンスが少ないまま成長し、自身が成長段階で生活能力や生活スキルを学んできていない。子どものしつけに自信がないという人が多く、迷いながら子育てをしているのが実態ではないだろうか。しかしこの保護者の社会的状況は彼らが招いたものではないのである。「今どきの親は…」と非難する前に、状況をそのまま受け入れて支援することが、社会に求められるのではないだろうか。

(2) 子どもとともに育つ

このような社会状況の中であっても、親になって成長したという人は多い。「どんな変化があったか」という調査では、モノの考え方に柔軟さが増し、自分をコントロールできるようになり、他者との関係の持ち方がうまくなった、また環境問題や社会問題に関心を持つようになった、などである。子どもが生まれ「親」になったからと言って、大人として完成しているわけではない。子どもと一緒に成長し、「親になっていく」のであるⁱ。

本報告の幼稚園の項でも述べられているように、特に幼い間は一生懸命に子どもを愛することが一番大切だ。この愛着関係がその後の親子関係の基本になり、愛された経験があるからこそ、子どもは親から離れていける。それは保護者も同じで、子どもが思春期に入り、強く反発されても、それを乗り越える「よりどころ」になるはずであり、親の手を離れようという子どもに冒険をさせる力にもなる。この関係の中でこそ、最後に子どもは親を乗り越えて、本当に自立していくのではないだろうか。自立への葛藤を親は恐れてはいけない。自らを律する心を育てるためには、まず自立することが求められる。

かわいい時期がすぎ、小学校に入学すると、教師は子どもの目の前に小石や小枝をばらまいて子どもに乗り越えさせようとする。集団生活を円滑に送るためにルールを守ることや我慢したり譲ったりすることも必要だということをつかませようとする。もし保護者がある意図を理解できない場合は担任や管理職と意見交換し、学校を信頼して、子どもに寄り添いながら後押ししてほしいと思う。また中学生や高校生になると、他人に迷惑をかけたり、半社会的な行動をとったりすることがあるかもしれない。その時には、親は本心から頭を下げて謝り、涙を流して全身全霊で諭すことだろう。その姿ほど、子どもに自分のしてしまったことの意味を教える行動はないと思う。親の強い愛情に裏打ちされた行動は、必ず子どもの心を動かし、自分を律することの大切さを教えるはずである。

子どもは、生まれてから巣立っていくまで、家庭の中の様々な場面で、自らを律する力を付けるチャンスに遭遇する。保護者自身も自らを律する心を育てるということ意識して、安易に子どもに迎合することなく、自分を制御しなければならないことを考えさせて育てていかなければならないのではないだろうか。

例えば、子どもたちのスマホの使い方が問題になっている。スマホは保護者が与えるものであるから、保護者の意志と責任で与える時期や使い方を話し合い、子どもが自らを律しながらスマホやネットを使いこなせる能力を身に付けられるように教育すべきである。これは保護者がICTに精通している必要はなく、大人としてのコミュニケーションスキルがあれば十分なのだから、自信を持って向き合っていきたいと思う。

2012年に話題になったアメリカの「18の約束」ⁱⁱも良いお手本になろう。

ⁱ 住田正樹編『子どもと家族』

ⁱⁱ 平成25年1月8日付東京新聞で紹介された、アメリカで13歳の息子のクリスマスプレゼントにスマートフォンをプレゼントした際に母親が書いた18の約束

(3) 学校が子育てネットワークの中心

人と人の結びつきが薄くなったと言われる現代、何をよりどころに子育てすればいいのだろうか。血縁が小さくなり、子供会をはじめとする各種の自治組織が衰退する中で、今地域で唯一、核となれるのは学校ではないだろうか。文部科学省も地域と共にある学校を作るために地域運営学校の設置を進めている。地域再生の鍵の一つとも言われている。身近な学校が地域の中のネットワークの中心となり、子育て情報を発信することは、保護者を大いに助けることになるし、保護者が自信をもって子どもを育てることに繋がるだろう。この場合の学校とは、教職員を指すだけではなく、学校運営協議会やPTA、学校区で行われる健全育成活動などすべてを含んでいる。

(4) 提言

① 一人の保護者として

子育てにつまずいたとき、悩んだとき、しっかりと学校と連携できれば、解決が近くなるのではないだろうか。親は家庭での子どもを知っているが、学校という集団の中で一日を過ごす子どもをよく理解しているのは教師である。まずは、すぐ相談できる関係を持っておくことが大切である。また学校も、常に開いて情報を発信し、保護者が来やすい雰囲気をつくらなければならない。教師も自身がよき相談相手になれるよう、普段から保護者会、学校公開などを利用しお互い知り合っておき、準備をしておいていただきたい。保護者との話しやすい関係は、学校での指導にも生きることはもちろんである。

一方、保護者は学校に足を運ぶ機会をできるだけ多く持ちたい。学校では、自分の子どもだけでなく、他の子ども、先生方をよく見てほしい。ⁱⁱⁱ

さらに保護者同士のつながりも大切である。つながり方は様々でよいが、子どもに関して話ができるオープンな雰囲気があれば、何かあったとき、相談したり助け合ったりが容易になる。

② PTAとして

もう一步踏み込んで関わるために、PTA活動がある。PTA（保護者の会等）に関わることがなぜ保護者を変えるのか。PTAでは自分の子ども以外の子どもたちを心配し、学校の活動を内側から見ることによって、視点が変わっていく。クラス全体として、学校全体としてどうすればいいのかを常に考えることになる。自分の子どもだけがうまく育っていてもそれはその子の幸せにはつながらない。その子の所属するクラス、学校、社会全体がうまくいっていない限り、本当の幸せはないのだから。そのことに気付かせてくれる。教師がどういう思いで子どもたちに接しているのかを知ることができ、なかなか話すことのない先輩保護者たちと接することで、視野が広がる。

PTAは任意のボランティアで、敬遠されることもあるが、学校と保護者、学校と地域、

ⁱⁱⁱ 『日本教育』No.437 P.12「すべては子どもたちのために」の「学校という一つの社会、その社会環境（教育環境）が、わが子に大きく関わっているのだということを肌で感じることで、親にとっては大切な場面です」

そして保護者同士をつなぐことはPTAにしかできない。つながりが薄くなったと言われる今だからこそ、PTAの活動の意義と重要性が問われていると思う。新しいつながりを人為的につくっていかねばならない時代に、大きな力となるはずである。

例えば、東京都のある中学校では、保護者を学校に呼び込もうと「PTAサポーター制度」を立ち上げ、学校に足を運ぶきっかけを作っている。参加できるサポーターの活動は十数種類もあり、土日や夜にしか時間のない父親たちも夜間パトロールや年2回の土曜日の学校清掃で汗を流している。また学校に来てもらった時にはできるだけ教師や保護者同士がおしゃべりをする場を設けている。このPTAサポーター制度の目的は学校支援であるが、本当は人と人のつながりをつくるためでもあり、保護者の学校への信頼感を育てている。毎年、全校生徒の7割以上の保護者が登録して参加し、土曜日の学校公開の時にはたくさんの保護者が来校し、夫婦での参観も多い。その他に年3回の保護者勉強会も開催しており、高名な先生をお呼びすることもあるが、校長や副校長、地域の先輩に話を聞くことにより、ここでも人間としての関係を築いている。

また鳥取のある小学校では、「タテ・ヨコ・ナナメの関係づくり」を目的に保幼小中合同研修会を開催している。企画段階から普段会うことのない人同士が顔を合わせる機会をつくり、こんな人が地域にすんでいると知ることからコミュニケーションが生まれている。また学校で懇談会よりも気楽な「茶話会」を企画し、お茶とお菓子でおしゃべりをして他学年の保護者や教師と知り合う機会をつくっているそうである。「個」が優先される生活の中で、深いつながりではなくても「あの人に相談しよう」と声をかけられる関係、昔とは違うけれど細くても自主的なつながりを目指している。

このようなPTA活動はあちこちで行われていることだろうし、決して派手な活動ではない。しかし子どもたちの教育環境を考えると、人と人がつながり、子どもたちを見る目を増やし、保護者が少しでも子育てに自信が持てるようになることは、現代ではとても大きな意義があり、確実に子どもの心の成長を支えることになる。今こそPTAに関わる皆さんに自信を持って、「子どもたちのために」活動してもらいたいと思う。親が他の子どもたち、地域の子どものために活動する姿は、子どもたちに自分を抑制し社会のために努力することの大切さを無言で教え、「自らを律する心」を育てることにつながっていく。

③ 地域の大人として

子どもが学校を卒業すると、保護者は地域のおじさんおばさんとして、学校や子どもをよく理解した隣人となり、子どもたちを見守る存在となる。だからPTAのOB・OGは民生児童委員、青少年委員、保護司や学校運営協議会の委員、地域コーディネーター、学校支援ボ

ランティアなどの人材の供給源となり、別の角度から子どもたちや学校・保護者を支えることになる。

昔からの地域祭りなど行事があれば、子どもはその中で人間関係を学び、自分を制御する

ことを自然に学ぶだろうし、親も地域とのつながりを持つことができる。しかしそのような祭りのない地域では、学校運営協議会やP T A、または上記のようなボランティアたちが中心となり、新しい地域祭りが行われている。運営は大変であるが、大人が楽しみ、大人同士の新しいつながりを作る場となっている。子どもたちも楽しむだけではない。大人と同じ目的をもって参加し、苦楽をともにし、同じ達成感を味わうことになる。学校だけでは味わえない地域の大人たちの懐の中で、自らを律する心を育てる大きなチャンスである。

④ 全ての大人たちへ

もちろん全ての地域で上記のような活動ができるわけではない。しかし親が安心して子育てをするために、社会の全ての人たちに子育てを支援するという意識をもっていただきたいと切に願います。

最近、盲導犬が傷つけられたり、白杖を持っている人がいわれのない被害にあったりと驚くような事件が続いているが、これは他人事ではなく、私たちも子育ての途中で同じようなことに遭遇している。混んだ電車の中でベビーカーに対する視線、騒ぐ小さな子どもたちへの大声の叱責、集まっているだけで白い目で見られる中高生など、心が冷たくなり身構えてしまう場面に遭遇した経験は誰もが持っているはずである。自分自身も成長過程で通って来た道だと、温かい視線で見てほしい場面が多々存在する。子どもは本来、あちこちで迷惑をかけながら成長していく。そこで保護者以外の大人に、叱られたりたしなめられたりして、我慢することを覚え、社会のルールを身に付けていくのではないだろうか。

しかし今の社会では、軋轢をさけるため親自身がその機会を奪い、子どもが他者と触れ合っ、つまづきながら自らを律する心を探ることを阻害してしまっているように思う。お互いを思いやりいたわることのできる懐の深い社会は、子どもや子育て中の親だけでなく、社会的マイノリティーを含めた、すべての人にとって生きやすい社会であるはずだ。

親が心置きなく、子どもに失敗させたりチャレンジさせたりするためには、安心して通える学校、のびのびと過ごせる地域、そして失敗を受け入れる余裕のある社会が必要である。そうなるためには政治主導や行政の支援も必要かもしれないが、世の中のたくさんの人のつながりと人々のこうありたいという強い意志から生まれるものではないだろうか。保護者も他人任せにせず、自分で見て学び、自分で判断して、人との絆を大切に、我が子だけではない子育てを、周りの人たちの力を借りて実践して欲しいと思う。

「絆」は知っているもの同士にだけあるのではない。知らなくてもどこかでつながり、支え合っている。それが社会なのだから。

<参考>

社団法人日本P T A全国協議会編『P T A実践事例集』